

## 龍ヶ崎の事業所に助成

### 読売光と愛

福祉作業所で働く人たちの自立を支援する読売光と愛の事業団の「生き生きチャレンジ助成事業」に、龍ヶ崎市の障害福祉サービス事業所「農楽里」が選ばれた。

「農楽里」は2018年7月に開設。10歳代から40歳代の計16人が同市駒馬町の事業所で、健康野菜として注目されるオカ

### シイタケ栽培 支援

ワカメやレタス、バジルなど、約70種類の野菜やハーブを栽培し、販売している。農薬や化学肥料を一切使わない有機農法で、安全な野菜・ハーブ作りに努めている。

今回の助成は、シイタケとキクラゲを新たに栽培するビニールハウス2棟の購入資金に充てる。市毛康司代表(71)は「ハウスでシイタケとキクラゲを安定的に栽培し、目玉商品にしたい」と意気込んでいる。

# 障害者就農の輪を広げる

## 蓮田のNPO「読売光と愛」助成で精米機

読売光と愛の事業団が展開する「生き生きチャレンジ助成事業」で、農業と福祉による「農福連携」で障害者の生活を支援するNPO法人「福祉ファーム里山」（蓮田市笹山）に50万円の助成金が贈られた。新たな事業として始める精米と配送に使う精米機の購入費に充てられる。



山本量彦理事長(79)によると、山本家は地元で代々続く農家で、農業の継続と地域環境の維持という観点から、障害者が農業を担う農福連携に乗り出した。2013年8月に「福祉ファーム里山」を設立。

14年12月に就労継続支援施設となり、事業がスタートした。

現在、農業生産部門として、イチゴのハウス栽培やネギ、ほうれん草など季節の野菜の露地栽培を行う「施設栽培部」、みそやジャムなど加工食品を製造する「加工・観光部」、ヤマトイモの受託栽培を担う「野菜部」の3

部があり、計13人の障害者が農業に携わっている。加工・観光部では将来、ブルーベリーの摘み取り体験など観光農園事業も構想している。

このほか、事務管理部門の総務部、障害者の生活管理の部門もあり、障害者の生活をトータルに支援している。別法人でグループホームも運営している。

山本理事長は「障害者と農業は相性がいい」と話す。ただ、現状は屋外作業が中心で、食品加工以外の就業者が天気の悪い日に、どうやって屋内作業を行うかという課題があった。

そんな折、地元で米を栽培する農業生産法人から精米と配送業務を委託したいとの打診があった。これまでの課題の解決につながり、収入増にも直結する話だったため、可能性を検討した結果、受託を決めた。

山本理事長は「精米機は4月には購入し、その後、早々に稼働させたい」と話している。

▲ 精米機の設置予定場所  
を見せる山本さん(2月24日、蓮田市で)

## 千葉の事業所助成

読売光と愛

障害者らの自立を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」（読売光と愛の事業団主催）の今年の助成先に、千葉市緑区の就労継続支援事業所「はあもにい」が選ばれた。同事業所は助

成金35万円で、利用者の在宅業務に必要なノートパソコンなどを購入する。

同事業所では、知的障害や精神障害を持つ男女15人が養蜂や農業、運営するカフェでの調理や接客などの業務を担っている。

新型コロナウイルスの影響で通勤を控える利用者が

増えたため、在宅勤務の希望者に貸与するノートパソコンなどの機材が必要になった。同事業所の長浜光子理事長（57）は「コロナ禍で働き方の多様化が進み、事業所にも対応が求められている。利用者の受け入れも拡大できるよう努めたい」と話した。

# 食品も心もあたたためて



青梅の作業所売店

## 「光と愛」助成で保温ケース

福祉作業所を応援する読売光と愛の事業団の「生き生きチャレンジ」の助成対象に、知的障害者授産施設「なかま亭」（青梅市今寺）が選ばれ、施設の売店にコロッケなどが保温できるショーケースが設置された。

「なかま亭」に設置されたホットショーケース。作りたてのからあげやコロッケ、ミニアメリカンドッグなどが並ぶ

「なかま亭」は弁当販売と食堂事業を行っており、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために食堂は休業している。弁当や惣菜の販売は続けているものの、売り上げは昨年度より約4割減になっている。子どもを対象に実施していた「無料朝食バイキング」も、おにぎりやカレーなどを入れた無料の「なっちゃん弁当」に替わった。毎週土曜日に毎回60〜80食を握供するうちに、子どもを連れてくる親が、ついでに揚げ物などを買っていくケースが増えた。そのうち、コンビニのように温かい品を求める声が寄せられ、売り上げを少しでも回復させようとショーケースの設置を思いついたという。導入後の評判は上々で、からあげなどの売り

2021年度の都立高校一般入試の願書の再提出が15日締め切られた。全日制170校の最終応募倍率は1・35倍で、現行の入試制度に変わった1994年度以降、最も低くなった。都教育委員会によると、全日制の募集人員計2万9500

上げが伸びている。同施設の佐藤登美子・施設長は「売れる分だけ仕事が増えて、働く方も喜ぶ。温かい品が買えることが広まれば、さらに売り上げが増えそう」と喜んでいた。

## 栗下都議が 離党届提出

都民ファ

小池知事が特別顧問を務

める。スト、善行、記者、を提、した、栗、議選、初当、日本、選。トの、した、極め、べき、

# 障害者コーヒー販売助成

## 読売光と愛 川崎の事業所スタンド設置

障害者らの自立を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」（読売光と愛の事業団主催）の今年の助成先に、川崎市中原区の就労継続支援事業所「レジネス」が選ばれた。同事業所では、精神障害を持つ男女25人が、コーヒー豆を焙煎して販売しており、助成金の60万円を使い、その一角にコーヒースタンドを設置するとしている。

同事業所は2014年に開設。障害の自己啓発ミーティングなどをするとともに、コーヒー豆を店頭で売るほか、例年は毎週のように地域のイベントなどで販売してきた。だが今年度は、新型コロナウイルスの影響でほとんどのイベントが中止となり、売り上げが4割減少していた。

事業所は市街地にあり、助成金で作るコーヒースタンドでは、テイクアウト販売を始める予定。専門家に依頼し、カフェラテやアイスコーヒーなどをいれる「障害者パリスタ」の育成もしてもらう。冬に偏っていた売り上げを夏場に広げ、収入を確保する。夏頃の開業を目指している。

接客や対面販売によって人とじかにふれあうことで、障害者のやりがい向上につながることも期待されるといい、同事業所の斉藤剛所長(41)は「地域の方にホッとしていただけるコーヒーを提供し、収入と地域貢献の両立を図りたい」と話した。

同助成事業は今年も全国31作業所から応募があり、「レジネス」を含む10作業所の助成が決まった。

障害者の働く福祉作業所を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」（読売光と愛の事業団主催）の対象施設に、県内から春日井市の就労支援事業所「藤東ジョブズ」が選ばれた。障害者が手軽に真空調理ができるように、新しい真空包装機とスチームオープンレンジの購入にあてる。

藤東ジョブズは2018年4月に開設。廃校となった小学校を再生した「高蔵寺まなびと交流センター」内にあり、センターにあるコミュニティカフェの調理場などで料理の下ごしらえをはじめ、ソースや総菜の調理、野菜の甘酢漬け・鶏肉の真空調理などを行っている。

運営するNPO法人「まちの

## 障害者の真空調理 助成

読売光と愛「生き生きチャレンジ」

エキスパネット」の治郎丸慶子代表(56)は「助成は大変ありがたい。障害者が楽しく笑顔で働ける場所を提供し、やりがいを感じる事ができるようにしたい」と力を込めた。

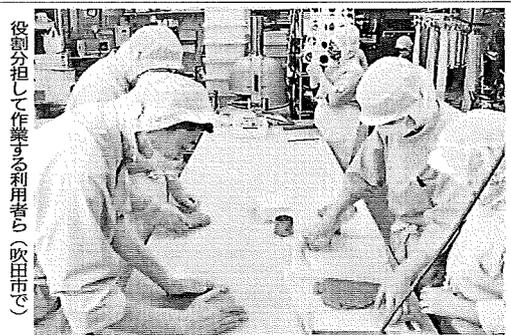


料理の下ごしらえなどを行う障害者ら（春日井市で）

### グーチョキパン屋さん

(吹田市)

### 車買い替え 移動販売に



役割分担して作業する利用者ら(吹田市で)

「グーチョキパン屋さん」などは出向いて販売し、知的障害者らの継続的な就労を支援するため、1994年にオープンした。現在はJR吹田駅近くの新旭町通り商店街に店を構え、22〜62歳の13人が働いている。

国産の小麦粉や天然酵母といった原材料にこだわり、生地から手作りする「オールスクラッチ製法」が特徴。材料の計量、成形、道具洗いや後片付けなど得意な作業を分担している。

パンは店頭のほか、企業助成金は車の買い替えに充てるつもりで、中井有哉店長(93)は「古い車で宅配は難しかったので、助成はありがたい。パン店のない地域への移動販売も考えた」と話している。

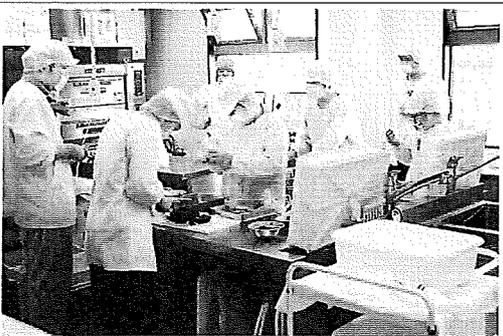
### 府内2作業所に助成

読売光と愛の事業団が福祉作業所で働く人たちの自立を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」の助成先に、府内からは「グーチョキパン屋さん」(吹田市)と、「夢工房くるみ」(柏原市)が選ばれた。

### 夢工房くるみ

(柏原市)

### カッター購入 効率よく



「夢工房くるみ」は2003年4月に知的障害者通所授産施設として開所し、09年からは生活介護や就労継続支援B型、就労移行支援事業を始めた。主に知的障害者ら約40人が利用し、クッキーやケーキなどの焼き菓子の製造に11人が携わっている。

利用者は通常、月曜日から金曜日まで、午前と午後各1時間半、材料の計量から生地作り、袋詰めなど

▲ ケーキ作りに励む利用者ら(柏原市で)

「夢工房くるみ」は、市内内外のイベントで販売するほか、市内の委託先で販売したり、企業からの注文などに応じたりしている。

今回の助成金では、クッキーの手動カッターを購入した。これまでクッキーの切り分けは職員が包丁で行ってきたが、カッターを導入したことで作業の効率化と利用者支援の両面での効果が見込まれる。

生活支援員の小林典之さん(34)は「クッキーをばらつきがなく、きれいに切れるはず」と喜んだ。

## 熊本の事業所「翔」に助成

### 光と愛の事業団 障害者の就労支援

福祉作業所で働く人の自立を支援する、読売光と愛の事業団の「生き生きチャレンジ助成事業」で、

今年度の助成対象に県内から就労継続支援A型事業所「翔」（熊本市西区田崎2）が選ばれた。助成金は70万円で、中古トラクターの購入に充てるといふ。

翔は、NPO法人熊本福祉会が2016年に開所。障害がある利用者10人が事業所の畑などで土作りや種

まき、収穫、箱詰めまでの一連の作業に毎日取り組んでいる。

施設は農機具が整っておらず、農地の整地で多くの時間と労力がかかっていたが、トラクターの導入で、効率や品質の向上が期待できるといふ。

理事長の奥野靖夫さん（41）は「夢のトラクター。畑の生産量が増えると、利用者の給料も上がり、やりがいにつながる」と喜びを語った。



ミニトラクターを収容する利用者